PART 4 2

特集 褥瘡外用薬　選び方・使い方のキホンとコツ

褥瘡外用薬の選び方・使い方ー実践編ー②高齢者の褥瘡治療の実践

磯貝善蔵
国立研究開発法人 国立長寿医療研究センター 皮膚科 医長

Point

- 高齢者の褥瘡では個々の状況に応じて診療目標を総合的に設定する
- 診療目標や状態に応じた外用薬を選択する
- 褥瘡治療の意義を本人と家族に十分に説明する

はじめに

褥瘡が高齢者に多い疾患であることは臨床現場で実感できるでしょう。近年，日本では高齢化社会の医療・介護に関して，地域包括ケアシステムという概念が打ち出されています。これに伴い，高齢者の褥瘡はさまざまな連携を重視した診療を求められています[1)]。現在，多くの高齢褥瘡患者は高次医療機関ではなく，中小病院や施設などで診療されています。一般に高齢患者は基礎疾患や合併症などの全身状態から侵襲の大きい手術を受けることが難しい場合が多く，かつ創の病態・重症度もさまざまです。よって高齢者の褥瘡では外用薬治療の機会が多く，かつ重要性が高くなります。本特集のタイトルは「褥瘡外用薬　選び方・使い方のキホンとコツ」ですが，高齢者医療全体も含めた視点，すなわち高齢者医療と褥瘡医療の接点をさまざまな面から捉えつつ記述してみます。

高齢者褥瘡治療の実践にあたっての基本的な留意点

高齢者褥瘡の診療には，褥瘡は基礎疾患を有する高齢者の皮膚にできた創傷であることを念頭に置くことが必要です。つまり，創傷のスペシャリストとしての専門性を十分発揮すると同時に，個々の患者の全体像を評価することが重要です。

褥瘡医療の理想と現実の間にはさまざまなギャップがあり，ガイドラインどおりに診療できないこともしばしばです。現実の医療では個々の患者に応じた方針を立てて実践しなくてはいけません。しかし，その基盤となる考え方は示されていませんでした。

高齢者褥瘡治療の総論
～全身状態や療養場面が多様であることを踏まえて診療目標を総合的に設定する～

高齢褥瘡患者では創治癒を目標としつつも，治癒を最優先できない場合がありえます。しかし，このことは褥瘡をそのまま放置してよいという意味ではありません。個々の褥瘡に対して患者の状況に応じた治療を必要とする場面が多く，多面的な診療が必要なのです。そのためには，どうして個々の高齢者に褥瘡ができたのかという視点をもち，褥瘡の創傷治癒過程での感染や炎症病態が全身合併症を起こすことも考慮に入れます。さらに，介護者の身体的・心理的負担を考慮する必要があります。

高齢者褥瘡の診療目標の設定は医療者だけではできません。本人や家族の意向や，予測される苦痛を十分に考慮する必要があります。また，認知症患者では自身が褥瘡診療目標を設定することができない場合もあり，家族の考えも重要になります。その際には患者が感じる苦痛が褥瘡治療によってどのように改善するかという見込みを提示する必要があります。一方で，治療に伴う疼痛や侵襲，体位制限などの負担についても選択肢を提示しつつ説明しなくてはいけません。褥瘡が継続することによる全身状態への影響も考慮する必要があります。さまざまな点について，どのように考察して，目的を設定し，説明したらよいでしょうか。本稿では筆者の私見ですが，高齢者の褥瘡診療の目標を患者の置かれた状況や全身状態に応じて表1のように整理してみました。個々の患者や家族との対話の中で参考にしていただき，治療方針を提案してみることをお勧めします。

高齢者褥瘡では褥瘡創部の診療は必ずしも「創閉鎖」を最優先することができない状況もしばしばあります。一方で創閉鎖が実現できればそれぞれの患者において，褥瘡に関連するすべての不利益を解消できることも事実です。よって，どんな

表1 高齢者の褥瘡診療の目標：患者の置かれた状況や全身状態に応じての考え方（筆者私見）

患者の置かれた状況	治療方針の例
がん終末期などで余命が短く，かつ予期できる場合	痛みがないように，また褥瘡からの感染を起こさないようにする
認知症患者の繰り返す誤嚥性肺炎のように，回復の見込みはあるが，長期的には終末期とみなされる場合	痛みなどの負担の少ない治療（多くは保存的治療）を行う
活動性の疾患はなさそうだが，褥瘡が関連したとみられる発熱や栄養低下がある場合	褥瘡からの滲出液や炎症病態のために，全身状態が悪化している可能性がある。炎症病態の改善を図る
高齢ではあるが，合併症がないか，コントロールされた状態のとき	完全治癒をめざす
褥瘡に伴った骨・軟部組織感染症	まずは救命や創拡大阻止のための外科的治療，薬物治療を行う